

研 究 成 果 報 告 書

(ふりがな) うめざわ きょうこ

氏 名 梅澤 京子

現 職 (所属名、職名等) 新潟県上越市立大町小学校 教諭

修了又は卒業年月、平成 3 年 3 月卒業

専攻又は専修コース名 家庭コース

小学校におけるスヌーズレン活動
～特別支援学級の交流活動と子どもたちの振り返りから～

1 はじめに

平成 30 年度に上越教育大学学校教育実践研究センターのスヌーズレンルーム訪問から始まり、令和元年度から特別支援学級の子どもたちと共に楽しいスヌーズレンルーム作り、全校の友達、近隣の学校の特別支援の必要な友達への紹介と交流へ活動を広げてきた。子どもたちは自分たちでたっぷりとスヌーズレンルームを味わい、堪能することで、自信をもって楽しさを紹介することができ、さらに、友達と一緒に活動することで、自分のやっている活動の意義を感じてきた。全校の子どもたちは、週 2 回のロングの昼休みにルームを利用し、友達と楽しむ姿、ゆっくりとリラックスする姿などを見せ、学校内の居場所の一つとして、その楽しさを実感している。令和 2 年からのコロナ禍で、感染状況に応じて活動を中断することがあったが、再開した時の子どもたちの姿から、先の見えない不安な状況だからこそ活動を続ける必要があると考えて継続してきた。令和 4 年度の交流活動の実践と校内の交流活動において利用した子どものグーグルフォームによる振り返りを行った結果の考察を報告する。

2 交流活動の実践報告と成果

(1) 文化祭でスヌーズレンルームを開室～飾り作りイベント・作品の紹介～

当校では、昼休みに委員会や学級主催の様々なイベントを行っている。特別支援学級でも、カフェを開いたり、スヌーズレンルームを紹介したりしてきた。また、特別支援学級主催の「スヌーズレンの飾り作りイベント」も行った。令和 3 年度は、蛍光のポスターカラーで模造紙に自由に絵を描くお絵かきイベント、令和 4 年度は蛍光のアイロンビーズの飾り作りイベントを行った。特別支援学級の子どもたちが、昼の放送で知らせたり、ポスターを作って各学級で説明をしたりした。当日は、全校の多くの子どもたちが図工室に集まり、お絵かきやアイロンビーズの作品作りを行った。特別支援学級の子どもたちが材料を用意し、作り方を伝え、参加していた子どもたちが思い思いの作品作りをした。「スヌーズレンの飾り作りイベント」では、一緒に楽しそうに話をしながら絵を描いたり、作品を作ったりしていた。後日、出来上がった絵やアイロンビーズの作品をスヌーズレンルームの壁いっぱい飾り、イベントに参加していた子どもたちは、喜んで自分の作品を見に来ていた。ブラックラ

イトで光る絵を見ることはもちろん、3Dめがねをかけて、飛び出して見えるのを楽しんでいる子どもも多くいた。また、文化祭では、スヌーズレンルームを開室し、「スヌーズレンの飾り作りイベント」で制作した絵や作品を飾った。保護者と一緒にルームを訪れ、自分の描いた絵や作品について保護者に伝える様子も見られた。



写真1 「蛍光絵の具でお絵かき」



写真2 「アイロンビーズの作品作り」

(2) 読書週間のブラックパネルシアターイベント

読書週間に図書委員の児童によるブラックパネルシアターイベントを行った。「NPO スヌーズレンを普及する会」の無料の貸し出しを利用し、リストの中から図書委員が選び、「はらぺこあおむし」「だるまさんと」「だるまさんの」「だるまさんが」のだるまさんシリーズとした。パネルシアターセットが届き、休み時間に演じる練習を数回行った。「はらぺこあおむし」は音楽CDがついていて、その歌に合わせてパネルを置いていくやり方だった。当日は、低学年を中心に10名前後の子どもたちが集まった。最後にあおむしが蝶になる場面では、見ている子どもたちから歓声が上がり、感動的な場面となった。「だるまさんシリーズ」は、パネルに書いてある文字を読むとお話が進むので、自分たちの声で演じることにした。「だるまさんの」とリズムカルな声に、聞いている子どもたちも掛け声をかけると一緒に言う子も出てきて盛り上がった。暗い部屋でブラックライトで光る蛍光の絵は、見ている人の集中を高め、ストーリーや演出をじっくりと楽しむことができる効果があると感じた。



写真3 「ブラックパネルシアター」

(3) オンライン交流会で紹介しよう

近隣の市の小学校でスヌーズレン活動を開始するという話を聞き、相手校の担当者と相談し、令和3年12月に交流会を行った。当校でどんなふうのスヌーズレンルームを始めたか、どんな活動をしているかなど、スヌーズレンルームをリモートで紹介した。はじめの会を教室で行い、挨拶と自己紹介をした。そして、タブレットを移動し、スヌーズレンルームの扉を開けると、「わー」と歓声があがった。ぐると部屋の様子を見せた後、特別支援学級の子どもが一人一つずつ自分のお気に入りの

アイテム（バブルチューブ、アロマ、クッションなど）を画面に映して紹介した。交流会の計画段階では、スヌーズレンルームのよさがリモートで伝わるか不安だった。しかし、相手校の友達が画面に釘付けになっている様子をこちらの子どもたちも感じることができ、一生懸命に自分たちのルームのよさを精一杯伝えようとしていた。そのあと、相手校の友達や先生から質問を受け付けた。実際にルームの中でリラックスして楽しそうに遊んでいる姿も見てもらいながら、会話を続けた。交流会の後、相手校の子どもたちから自分たちのスヌーズレンルームを作る意欲をもつことが出来たと感想をいただいた。特別支援学級の子どもたちが自分たちの今までの活動の楽しさを友達に伝えることができた喜びや今までやってきたことを認めてもらった満足感を感じることができた。

その後、活動を開始しているとの連絡があり、さらに、お互いのルームを見せ合い、活動を紹介し合う交流会を計画した。自分たちが紹介したことで、他校の友達がルーム作りの活動を行っていることを実感したり、自分たちのルームを再度紹介したりすることで、さらに活動の意義を感じることを目的に、令和5年3月、相手校のスヌーズレンルームと当校のスヌーズレンルームを紹介し合う交流会を前回参加した子どもたち（4名）で行った。前回と同様、教室で開会の挨拶、自己紹介を行い、まず相手校のスヌーズレンルームの紹介を見せてもらった。当校の子どもたちは、画面に釘付けになって、紹介を聞いていた。「わー、きれい。」などと歓声も上がっていた。

その後、当校の子どもたちは、スヌーズレンルームに移動し、自分たちのスヌーズレンルームを紹介した。自分でタブレットを持ち、次々と部屋の様子を映し出し、グッズを紹介していった。ほとんどアドリブで、紹介や司会の言葉を言いながら、交流会を続けていた。質問タイムでは、お互いに、気になるグッズのことや部屋の仕組みなどを質問し合っていた。最後に感想を発表し合い、お互いの今までやってきた活動の意義を確認することができた。



写真4 リモート交流会

3 スヌーズレン活動の分析と考察

～校内の交流活動でスヌーズレンルームを利用した子どもたちの振り返りより～

（1）活動の分析

特別支援学級の子どもたちが紹介し、交流活動として始めた昼休みのスヌーズレン活動は、全校の子どもたちが昼休みに過ごす場所の一つとして定着している。利用している子どもの様子の記録を行動観察と子どもの振り返りカードの記入で行っている。今年度は、コロナ禍であり、時間を区切って完全予約制（6名で15分間）での利用とし、今まで紙に記入していた振り返りを容易にタブレットで実施出来るグーグルフォームを使用した。学年、名前、そして、①「今日のスヌーズレンルームはどうでしたか」「とてもよかった」「よかった」「よくなかった」「ぜんぜんよくなかった」の四択とその理由（自由記述）②「スヌーズレンルームで好きな遊びはなんですか」（複数回答可の選択、その他は自由記述）③「あなたにとってスヌーズレンルームとはどんなところですか」（自由記述）の3

つの問いを設定した。119名の子ども（利用者の人数の約80%）が回答した。

①「今日のスノーズレンルームはどうでしたか」の問いに対して86%の子どもが「とてもよかった」12%の子どもが「よかった」と答えており、98%の子どもたちが肯定的な感想をもっていることが分かる。「よくなかった」と答えた子どもは2%で、一緒になったメンバーへのネガティブな感情が理由と回答していた。これは、スノーズレンルームに対する感想ではなかったが、交流活動として友達との関係は大きな影響があることが分かる。

「とてもよかった」「よかった」理由は、「楽しかったから」が多く、以下、図4に示した通りである。クッション、光などの「物的環境」と友達の「人的環境」がよかった理由となり、また、活動そ

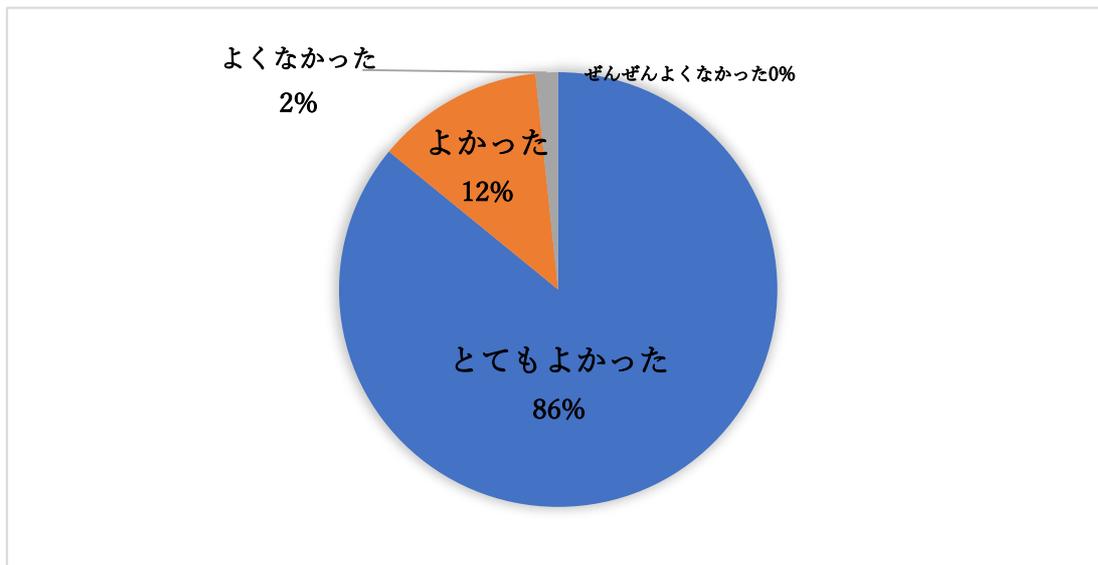


図1 今日のスノーズレンルームはどうでしたか

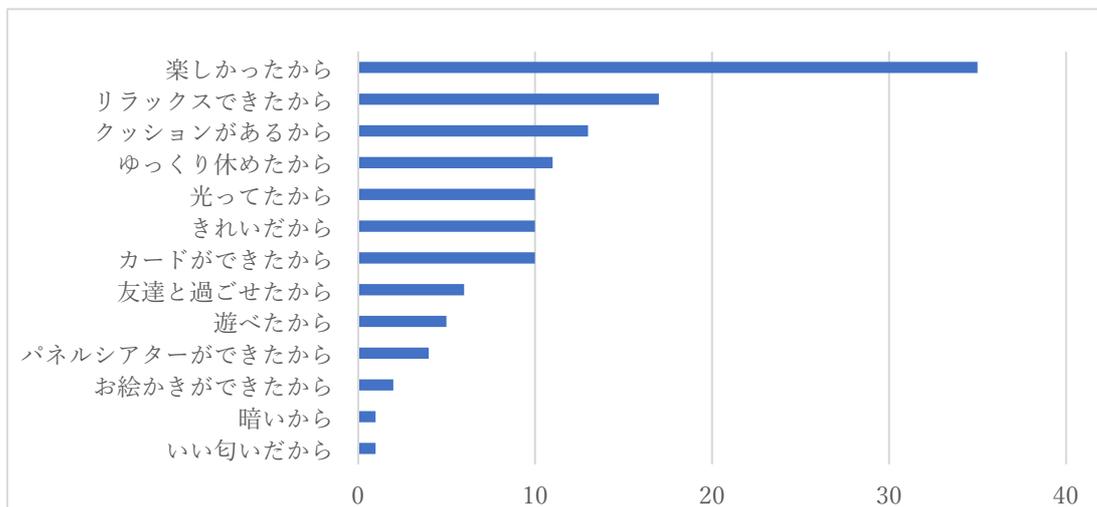


図2 「とてもよかった」「よかった」理由

のものを楽しむ活動的な理由と心身を休める理由から、活動と休養の両面を子どもたちが求めていることが伺える。

②「スノーズレンルームで好きな遊びは何ですか」の問いでは、「クッション」が26%と一番多く、次に「3Dめがね」が14%「お絵かき」13%「光（バブルチューブ、ミラーボールなど）」

10%、「カード（マッチングカード9%・文字カード6%・数字カード4%）」「アロマ」8%「うちわ」6%「パネルシアター」「アイロンビーズ」が共に2%であった。クッションでは特にヨギボーのクッションが人気で、蛍光の布用の絵の具で絵を描いたクッションでも楽しんでいる様子がある。3Dめがねは、蛍光の絵が浮かび上がる感覚を味わうことができ、普段の生活にはないもので興味ももてるものと思われる。蛍光ペンでのお絵かきではA6の紙片を用意し自由に絵を描けるようにしている。友達や先生に向けての手紙を書く子もいた。バブルチューブやミラーボールなどの光では、いろいろな色を使った遊びやお話を創作する様子が見られた。また、いろいろな光の色をジュースに見立てたカフェごっこや、ミラーボールを水晶玉にして占いごっこなどを行っていることもあった。また、好みの香りのアロマオイルを選んだり、蛍光のうちわで友達に風を送ったりする様子からも、自分から物や人に働きかける動きがあった。文字や数字、マッチングなどのカードでは、集まったメ

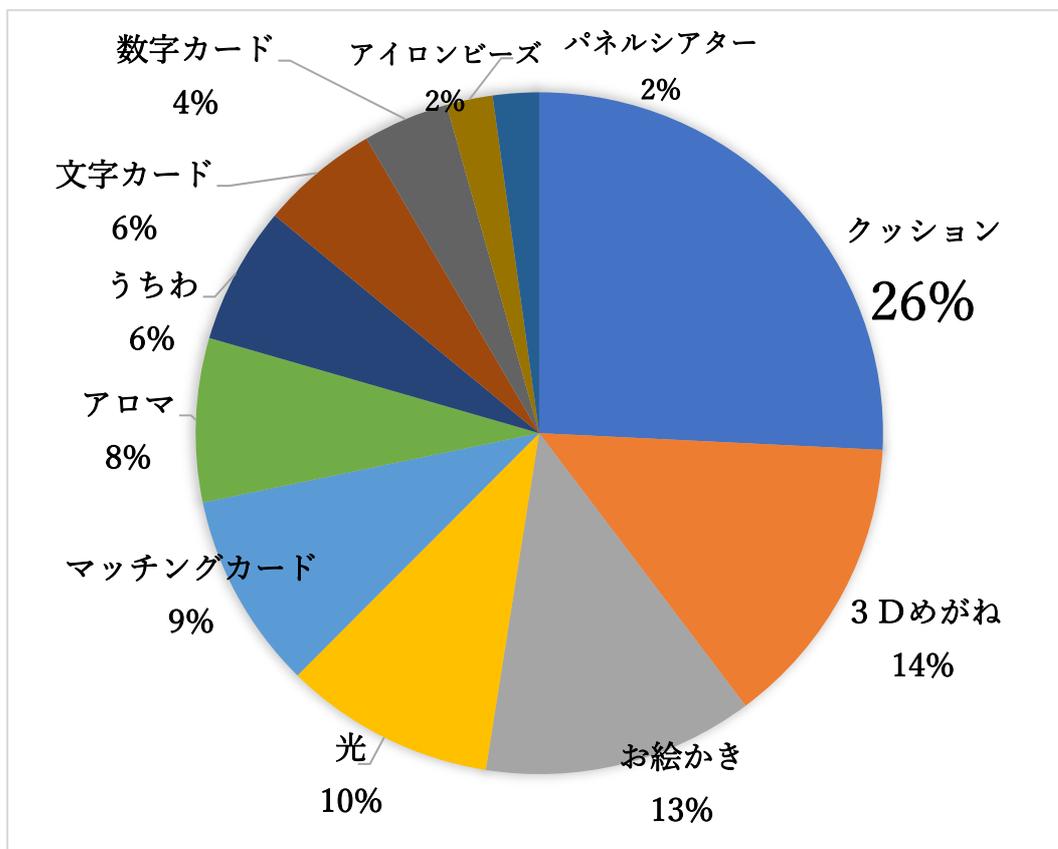


図3 「スヌーズレンルームで好きな遊びは何ですか」

ンバーで「かるた」や「言葉作り」などの遊び方を相談して決めて楽しんでいる様子が見られた。クッションの感触や蛍光塗料、光源装置の光、アロマなどから、触覚、視覚、嗅覚など様々な感覚を使っていることが分かった。

③「あなたにとってスヌーズレンルームとはどんなところですか」の問いでは、自由記述で一人一人が思い思いの言葉を書き、その種類は31であった。意味の似ている言葉を合わせて8種類に絞り、一番多かったのは「楽しいところ」であった。そして、「ゆっくり休めるところ」「光がきれいなどこ

る」が次に多かった。さらに、「ストレスがいやされる場所」「仲間・友達と過ごす場所」「気持ちが落ち着く場所」「天国・楽園・特別な場所」「また来たい場所」であった。子どもたちにとって、「友達と楽しく過ごす場所」であり、「ゆっくり休めてストレスが癒される場所」であると言える。

「今日のスノーズレンルームがよかった理由」と「あなたにとってスノーズレンルームとは？」の結果を比べて共通点がいくつか上げられる。まず、「楽しい」が一番多かったことである。「楽しい」という感情の中身については、子どもたちに再質問をしたり、子どもたちの姿からさらに検討したりすることが必要になるが、まずは、スノーズレン活動が「楽しい」と思える活動であるということが確認できた。また、「ゆっくり休むこと」「光がきれい」「癒し・落ち着く・リラックス」「友達と過ごす」ことも共通して挙げられていた。

(2) 活動の意義

子どもたちの振り返りから、スノーズレンルームで過ごしている子どもたちは、スノーズレンの語源であるスナップレン（探索する）とドゥーズレン（うとうとする）の言葉通りの2種類の様相を見せ、子どもたちがこれら2つの、またはどちらか1つのことをスノーズレンルームに求めていることが考えら

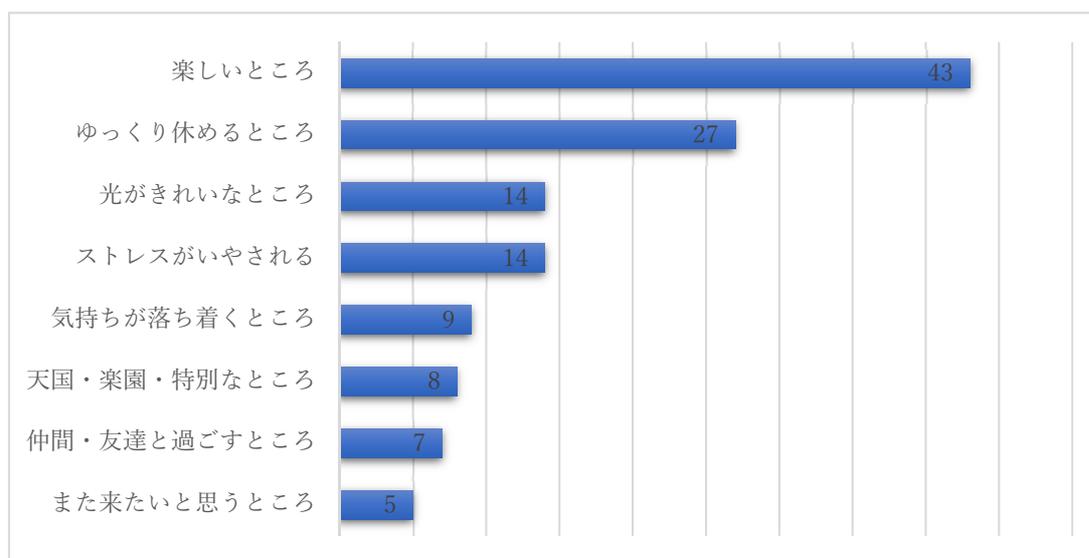


図4 「あなたにとってスノーズレンルームとはどんな場所ですか」

れる。普段活動的な子どもが静かに考えて味わっている様子があったり、反対に、普段大人しい子どもが饒舌に話し出したり、積極的にいろいろな遊びを試したりしている様子からも、スノーズレンルームは、探索とリラックスが出来る場所であると言える。

また、これらの子どもたちの振り返りで上がった言葉は、特別支援学級の教育課程に位置付けられている自立活動の内容（「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の調整」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」）にも関連が見られる。「ゆっくり休める」は「健康の保持」、「仲間・友達と過ごす」は「人間関係の調整」「コミュニケーション」、「ストレスが癒される」は「心理的な安定」、「光がきれい」は「環境の把握」と関連が見られた。6つの内容のうちの5つと関連が認めら

れ、子どもたちの心身の調和的発達を促す意義のある活動であると考えられる。

4 おわりに

以上、「全校児童とのスヌーズレンの飾り作りイベント」「図書委員によるパネルシアターイベント」「他校とのオンライン交流会」の交流活動の実践とスヌーズレンルームを利用した子どもたちの振り返りの分析と考察を述べた。交流活動を通して子どもたちはスヌーズレンを味わいつつ、自分自身や友達とかかわる楽しさを味わうことが出来た。また、どの子どもたちにとっても、スヌーズレン活動が心身の調和的発達を促す活動であることが考えられる。今後も、子どもたちの言葉にならない不安や喜びに寄り添うための人的かつ物的の環境整備、校内職員間の情報共有を継続し、スヌーズレン活動を一層充実させたい。

さらに、当校では、市内外の学校からも子どもを受け入れている言語障害通級指導教室と難聴通級指導教室の指導にもスヌーズレン活動を取り入れている。そこでも、身体をリラックスさせたり、気持ちを開いて表現したりする様子が見られ、継続利用により効果が認められてきている。また、上越教育大学を中心に福祉事業所、放課後等デイサービス、近隣の小学校と活動の交流や情報交換を行いながら、様々なニーズのある人々とスヌーズレン活動を繰り返し広げている。今後も、一人一人に寄り添ったスヌーズレン活動が、より多くの人々のために活用されていくことを期待している。



写真5 スヌーズレンルーム



写真6 スヌーズレングッズ